

深町英夫編訳

『孫文革命文集』

(岩波文庫)

岩波書店 二〇一一・九刊

A6 四七八頁 一一四〇円

「私が毎回、同志諸君にお会いする目的は、他でもありません、いつも同志諸君に、寄付をお願いするためです」。これは孫文が一九一〇年に海峽植民地のペナンで行なった演説の冒頭である(本書一三九頁)。このように、支援してくれそうな相手に対して思いを込めて訴えかけるのが、孫文の常套手段といえる。

孫文は、近代中国を代表する革命家の一人であり、多数の日本人との交友についてもよく知られている。本書は、孫文が政治活動を本格的に開始してから死去するまでに残した多様な形態の文章を選び出して、日本語に翻訳したものである(ただし、そもそも原文が日本語として残っているものも一部含まれる)。編訳者の深町氏によれば、「本書は孫文の多種多様な言説を時系列に沿って配置し、その革命運動の全過程をほぼ辿れるように構成してある。つまり本書は、孫文の革命生涯を可能な限り凝集した、言行録という性質を持つ」(四五七頁)。

本書は三部から成る。第一部「民族共和国への道程(二八九三―一九二二年)」は、孫文が清朝打倒をめざす革命運動を開始してから、中華民国が成立する頃までを扱う。第二部「中央政権への挑戦(一九三―一九二二年)」は、孫文が袁世凱との対決姿勢を明示

したところから、民国初年の政情不安のなかで孫文が自己を中心とする政権を打ち建てようと奮闘した過程を追う。第三部「革命運動の再構築(一九三―一九二五年)」は、孫文がソ連からの支援を受けつつ中国国民党を再組織化していく晩年の文章や演説を紹介している。

孫文の発言は、それを受け取る相手を十分に意識しながら、最も効果的な力を發揮するように、周到になされていたように私は思われる。当時の人々が孫文に引きつけられた大きな理由は、その言葉の力にあった。孫文は抗しがたい魅力を備えた天性の革命家だったとみてよい。裏を返して言えば、「人をみて法を説く」式の宣伝方法、つまり二枚舌を常用していたということになる。むろん、孫文自身としては一貫した革命の理想を持っていたと言つてよいのだろうが、おおむね彼は自前の財政的・軍事的な資源を持たずに運動に邁進していたので、舌先三寸で外部から支援を何とか引き出さねばならなかった。一九一八年に、孫文がアメリカのウィルソン大統領に宛てた電報(二三八―二四三頁)と日本の外交官に支持を求めた談話(二四六―二四九頁)とを比べれば、前者は日本を敵視し、後者はアメリカをそしっているのが面白い。

こうしてみると、孫文の発言の多くは、個々の状況を離れて解読できない。本書は、文章ごとに詳しい解題を付し、文脈に即して彼の言葉を理解できるように工夫が施されている。膨大な孫文研究の成果を踏まえた解題のおかげで、孫文の言葉を当時の政治状況のなかに的確に位置づけられるようになっていたのである。

本書で紹介された孫文の発言は、彼の活動の総体をなるべく紹

介するようには選ばれていると思われ、版本についても周到な調査がなされている。とくに英語から翻訳された文章が多いのも特徴であって、孫文が日本人に見せていた顔が一面に過ぎないことが明瞭にわかる。読みやすい訳文、過不足ない注記のおかげで、読者が孫文をめぐる中国革命の曲折へと容易に近づくことができるようになったことを喜びたい。

(吉澤誠一郎)